

日本国外の研究施設で、Molecular ImagingやMRIを用いた最先端の機能イメージング、そしてHigh Field MRIの現状と可能性を学ぶ目的で海外研修に参加した。研修先のスタンフォード大学では、最新の装置を用いた数々の研究が進行中であり、MR-PET、Hyper Polarized MRについての講義は特に興味深かった。まだ研究段階である内容も多かったが、講師の先生方は、これからの展望と可能性、そして自身の研究の斬新さを惜しげもなくわれわれ受講生に対して丁寧に説明されていた。7TのHigh Field MR画像には感嘆を覚えたが、300MHzのRF波は周波数が高すぎるため、将来臨床ではもう少し低い静磁場強度に落ち着くのではないかという見解であった。これについては私も同じ疑問を持っていたが、人体への応用にはまだ時間を要するようである。また、医療の世界にモバイルクラウドを取り入れる構想を現実のものとしつつある技術を拝見した。iPadなどの携帯通信端末(スマートデバイス)を用いて、検査中の画像のリアルタイム表示や種々の計測などが遠隔の端末で行うことが可能であった。今後放射線科領域をはじめ、医療の世界でこの技術はさらに多機能化して普及すると思われる。このように、研修目的を達成できた以上に真新しい内容を学習でき、貴重な経験となった。

講義や施設見学以外にも、当研修で出会った仲間と毎日のようにディスカッションをして交流を深めることができたことは非常に有意義であった。参加者全員がそれぞれ目的を持って研修に臨み、一つでも多くの情報を吸収しようという個々の姿勢が周りにも良い刺激となり活気にあふれていた。このような向上心のある仲間と当研修を通して出会えたことは、私にとって何物にも代え難い財産である。今後も日頃から積極的に情報交換を行い、同時に切磋琢磨して放射線技術学を発揚していければと考えている。

また、米国の診療放射線技師の体制や実態を拝聴し、目の当たりにすることで、日本との相違点を認識することができた。米国は各分野でライセンスが存在し、業務に携るためには技師免許のほかにライセンスの取得が必須であるため、目的の分野に特化した学習、訓練が行われている。一方、日本は技師免許があればモダリティを問わず放射線部門のどの検査も担当することが認められており、複数のモダリティを兼務せざるを得ない施設も少なくない。しかし、日常の業務で疑問を持ったり、興味のある分野があれば、新しい情報を積極的に入手して学習や研究を推し進めていく必要があるのではないだろうか。近年、日本では放射線技術学に関する様々な認定制度が設立され、また保健学博士号を取得できる大学院が設置されるようになった。このように、われわれ診療放射線技師が業務に直結する内容で学術的な目標を立てることができる環境は身近に存在する。私も含め、各自の専門性を確立する米国の体制に引けを取らない日本の環境を有効に活用し、個々の向上、発展につなげる必要があると考える。

最後に引率でご尽力いただいた神戸大学医学部附属病院の京谷氏、海外研修の参加を快諾してくれた名古屋市立大学病院中央放射線部諸氏、このような機会を与えて頂いた日本放射線技術学会の皆様へ深謝する。



講義の合間にみんなで一息(前列左から2人目が筆者)